

高齢者の孤立を防ぐための身近な居場所づくり

静岡福祉大学 社会福祉学部 榎木ゼミ（研究室）

指導教員：教授 榎木博之

参加学生：金成真治、佐藤柚葉、鈴木愛梨

平野大夢、渡邊紅

1 要約

高齢者の孤立に関する現状及び居場所の課題を明らかにし、伊豆の国市の高齢者の居場所づくりに対する施策についての提言を行うことを目的として、高齢者の居場所についての先行研究、市内で行われている高齢者の居場所、他市で行われている児童・障害・高齢者を対象とした居場所の現地調査及び実施者・参加者へのヒヤリングを行った。提言として①生活の動線上の居場所、②高齢者だけではなく多世代が集う居場所、③靴を脱いで参加できる居場所の3点をあげた。

2 研究の目的

伊豆の国市の高齢化率は33.5%（令和3年4月1日現在）と市民の3人に1人が高齢者となっている。また、単身の高齢化世帯の割合が17.5%となっており、地域や社会から孤立してしまう高齢者の増加が問題となっている。高齢者が地域と関わりを保っていくため、高齢者の通える範囲での居場所づくりが急務となっている。本研究では、高齢者の孤立に関する現状及び居場所の課題を明らかにし、伊豆の国市の高齢者の居場所づくりに対する施策についての提言を行うことを目的とする。

3 研究の内容

(1) 当初の計画

①高齢者の社会的孤立に関する先行研究をまとめる。②高齢者の社会的孤立を防ぐための居場所の先進事例をまとめる。③伊豆の国市の高齢者の孤立に関する現状について現地調査及び関係機関へのヒヤリングを行う。④伊豆の国市住民で既存の居場所を活用している人、していない人へのインタビュー調査を行う。⑤先行研究・先行事例、関係機関への聞き取り、住民へのインタビューを行った結果を報告し、伊豆の国市長寿介護課と意見交換を行う。⑥高齢者の居場所づくりに対する施策について報告書としてまとめ、提言する。

(2) 実際の内容

①高齢者の居場所に関する先行研究をまとめる。②伊豆の国市の高齢者の居場所に関する現状について現地調査及び実施者及び参加者のヒヤリングを行う。③伊豆の国市以外の地域で児童・障害・高齢者を対象とした居場所事業を行っている機関へのヒヤリング調査を行う。④伊豆の国市で居場所事業を実施する。⑤高齢者の居場所づくりに対する施策について報告書としてまとめ、提言する。

4 研究の成果

(1) 実績・成果と課題

①高齢者の居場所に関する先行研究

高齢者の居場所の必要性について、金（2020）は老人福祉会館の利用者への調査から、「独居高齢者や家に居場所がない高齢者には、社会的居場所利用へのソーシャルサポートが求められ、老人福祉会館のような居場所での社会活動や他者とのつながりが介護予防に繋がる」¹⁾としている。大石（2021）は「一人でいられる場所、パートナーや家族と過ごせる場所だけではなく、人とかかわりの中で自分の存在を感じることでできる社会的な居場所も必要だろう」²⁾と社会的居場所の必要性を述べている。西川（2017）は、高齢者の居場所の条件として「(1)そこに安心していられるという『受容感』、(2)そこで新たな学びがあり、自身が成長していると感じられる『自己効力感』、(3)自分がそこで役立つ、そこに役割・出番があるという『自己有用感』が必要である」³⁾としている。このように高齢者にとって居場所は介護予防としてだけではなく、生活しているうえで欠かせない場所ということができる。

一方で高齢者の居場所の課題について、斎藤（2021）は、社会的居場所の必要性を明確にしながらも、「人口減少下にある地方自治体は社会的居場所の運営が困難な環境であること」⁴⁾と継続的な運営について問題提起している。また、西（2021）は「イベントの主催者がたびたび嘆いてきた『本当に来てほしい人がイベントに来てくれない』問題がある」⁵⁾と居場所への参加が必要な人が参加していないという課題をあげている。

今後の方向性として、金（2020）は、「地域在住高齢者には居場所が必要であり、今後はさらに個々の高齢者に合わせた社会的居場所形成のソーシャルサポートの検討が必要である」⁶⁾としている。菊池（2022）は、高齢者の居場所づくりの活動は、就労からボランティアまで活動条件は幅広く、健康状態や年齢層によって選択できるバリエーションが出現してきている。高齢者にとって、自分に適した居場所での活動は、社会的な存在として充実感ある生活を営めるものであるため、居場所となる受け皿のバリエーションの更なる拡大や、継続的なエンパワメントの支援も担う必要がある⁷⁾としている。

このように先行研究では、高齢者の居場所の必要性を明らかにしつつも、継続的運営や参加者について課題があり、今後は個々に合わせた居場所づくりの必要性について課題提起している。

②伊豆の国市の高齢者の居場所に関する現地調査及び関係機関へのヒヤリング

i 伊豆の国市高齢者温泉交流館

伊豆の国市高齢者温泉交流館は高齢者の居場所の1つとして挙げられる。毎週火曜日から土曜日の10時から15時まで営業をしている。主な利用者は伊豆の国市在住の60歳以上の方々である。温泉交流館までの主な交通手段として、車・バス・徒歩がある。

利用者している方には以下のように聞き取り調査を行ったところ、以下の回答があった。男性A「週に3回ほど利用しています。家では味わえない広い場所でのびのび温泉に浸かることができ気持ちいいですね。近所のスーパーで買い物をするついでに通っています。」女性B「友達と散歩がてらに來ます。健康の為に歩いて温泉に行ける距離なので、習慣になっています。家に帰れば、ご飯を食べて寝るだけでいいので温泉交流館でお風呂に入れるのは帰ってからの体がとても楽になります。」

以上のことより、高齢者の居場所としての機能を果たしている。一方で、コロナ禍の影響により温泉施設としての機能に限定しており、利用者同士の交流の機会の提供ができていないことが課題として挙げられる。



ii 浮橋体操教室

浮橋体操教室とは、浮橋公民館内の広々としたホールにて週一回のペースで開催されている体操教室であり、公民館周辺に住む高齢者たちが参加している。現地調査を行った日（2022年9月30日）は講師1名と参加者13名（欠席2名）であった。公民館への交通手段は徒歩や自転車、家族の送迎など参加者の身体状況や生活状況によって様々である。講師が1段上がったステージで説明をしながらデモプレイを実施。頭の体操、歌を歌いながらの体操、全身の体操やマッサージを1時間程度行っている。長期間利用している参加者は動作がスムーズであり、身体能力及び身体機能の保持増進に繋がっている。また体操教室の開始前と終了後には参加者同士で近況報告や雑談をされている場面も多く見受けられ、居場所としての機能も果たしていることがわかった。

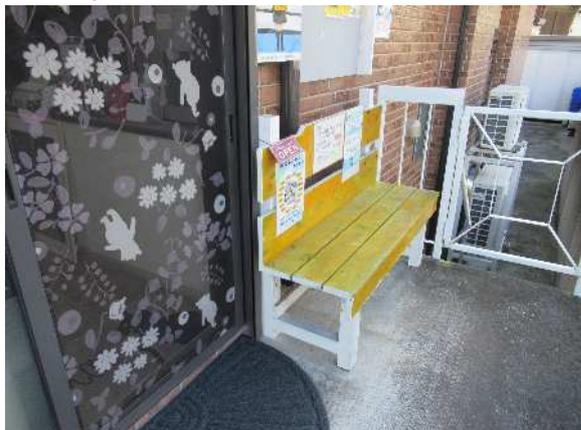
参加者からは、「知り合いと話をできるのが楽しみだし、なにより講師の先生の話が面白くて飽きない。」や「体を動かさないとすぐに悪くなることを私生活の中で痛感しているが一人ではやる気になれない。楽しく体を動かす機会ということで活用させてもらっている。」といった声

が聞かれた。

iii くっちゃべり処 よろずや

「くっちゃべり処 よろずや」では、以前経営していた駄菓子屋から、2020年に地域の方の居場所を中心とした雑貨屋として開始した。利用者は、開店日が不定期であることから1日2名程度であるが、年に2回のイベント開催では近隣住民で賑わう。利用者の交通手段は徒歩、自転車、自動車であり、利用目的は買い物だけではなく、昼寝や話をするなどと多岐にわたっていた。また、ハンドメイドの雑貨をはじめ、地元の食材や製品の販売、店前のベンチの設置などを行っていることから、「地元の良さ」「地域の繋がり」を大切にされていると実感した。

居場所の提供者は、「民生委員としてできることに限界はあるが、地元が好きで地域のために行動したい」という応援の気持ちや、高齢者が多く住む地域特性から、「何かあった時のネットワークづくりや、関係者(支援者)間での情報共有が大切になる」「地域住民が少しでも家から出て話ができるように」といった声・思いが挙げられた。課題としては、「民生委員の仕事等で忙しく、不定期の開店になっていること」「居場所をより多くの人へ周知する方法」について挙げられた。



③伊豆の国市以外の居場所の取り組みに関するヒヤリング調査

伊豆の国市以外の居場所の取り組み及び現状の課題について、ヒヤリング調査を行った。結果は以下のとおりである。

i 児童の居場所

要支援家庭・不登校児対象の子どもの居場所（静岡市葵区）

特別養護老人ホーム竜爪園では、地域貢献事業として要支援家庭の子どもや不登校児を対象とした子どもの居場所事業を複数展開している。共通の課題として、支援者である学生ボランティアが世代交代していく中で理念や支援方針をどのように継承していくか。また、利益の見込める事業ではないためどのように維持費や活動費といった必要経費を集めるかの2点が挙げられた。

子育て支援センター（富士宮市）

富士宮市社会福祉協議会が運営する子育て支援センターでは、保育園の選び方や家庭内での子育て方法などといった子育て情報の提供や、乳幼児を対象とした遊び場の提供、育児相談を行っている。子育て支援センターの課題点としては、コロナ禍の影響によりセンター内で人数制限をし、気軽に利用することができなくなったことである。上記の現状により、多くの母親から、自宅での子育てに対する相談件数が急増していることである。

ii 高齢者に関する居場所

「おたっしやクラブ」（焼津市）

特別養護老人ホームつばさで行っている居場所事業。介護保険が関わる為利用者へ居場所と共に1つのサービスとして提供をしている。参加者は、要支援の認定を受けている方が対象となり介護保険により決められた回数の中で利用をして、日常動作訓練や介護予防機能訓練等を行う。課題は、利用者へ自立やケアプランの目標を達成に向けた支援。絵手紙教室、大正琴教室への参加に伴い自宅で自主練習をして頂く為に練習を押し付けないことが課題である。

「だんらん」（沼津市原地区）

沼津市内にある原地域包括支援センターが行っている事業として、「だんらん」という地域住民の居場所が存在する。主な目的は、近場で介護相談ができる場所、介護相談である。週2日の活動を通して、高齢者が集まる居場所としての機能を果たしている。課題は「だんらん」に参加していない地域の中に閉じこもりの高齢者が多く存在することである。また独居高齢者も多く、

その方の参加を促すことであった。

iii 障害者に関する居場所

地域活動支援センター（富士宮市）

富士宮市社会福祉協議会が運営する地域活動支援センターでは、主な目的としては利用者の自由時間(余暇活動や他の利用者との交流を増やす、作業、生活相談)を地域と繋げることである。地域活動支援センターでの課題点は、利用者によって目的が違うからこそ利用者同士のすれ違いがあること。SNSを通した、職員が見えない場所での利用者同士のトラブルなどが挙げられた。

④くっちゃべり処 よろずやで居場所のイベント実施

伊豆の国市内での居場所のイベントは「くっちゃべり処 よろずや」を会場に、学生と居場所の提供者が協働して、2月に実施する予定である。アロマスプレーやハーバリウムを体験できるコーナーを設置し、多世代交流の場とする予定である。

(2) 今後の改善点や対策

先行研究や伊豆の国市・他市の現地調査において共通した課題として、居場所に参加する人は限定されていて、本当に必要な孤立している人が参加していないことである。この課題に対して、参加していない人の要因を明らかにしていく必要がある。また居場所といっても内容はそれぞれ違いがあり、市民がそれを選択することができるような居場所マップの作成も必要になる。

5 課題提出者・地域への提言

提言として①生活の動線上の居場所、②高齢者だけではない多世代が集う居場所、③靴を脱いで参加できる居場所の3点である。①は生活する上での動線上に居場所があれば、誰でも参加しやすくなる。「くっちゃべり処 よろずや」の前に置いてある椅子は、自然と住民同士が交流できる場所となっているので、生活の動線上に居場所があると自然と住民が交流できるのではないかと。②の多世代が集う居場所も、①との繋がりでの生活の動線上の場所にあれば高齢者に限定せず、住民同士が集う多世代が交流の場となる。③は靴を脱いで過ごすことができればリラックスできるので、心地よいと感じる居場所になるのではないかと考えられる。3つに共通していることとして、高齢者の居場所は特別な場ではなく、日常の中にあるものにしていくことで必要な人が参加しやすくなるのではないかと考える。

6 課題提出者・地域からの評価

伊豆の国市健康福祉部長寿介護課 課長 赤畑浩志様より

当市には3つの高齢者福祉施設や地域に点在しているサロン、体操教室などがありますが、今後、増加していく独居高齢者にとって、「ひとり」にならないための居場所とはどのような場所なのか、現在の居場所づくりの方向性は時代にあっているのかを違う目線から提言いただきたくお願いをしました。

提言をいただいた、生活の動線上にあることや多世代が集う居場所、靴を脱いで参加できる場所という点につきまして、現在のサロン活動等は有益であることを再確認いたしました。

また、浮橋体操教室を訪問していただいた際は、榎木ゼミの皆さんが体操から参加してくれたことをとてもうれしそうに語っていた教室の皆さんの笑顔を見て、世代の違う人たちも織り交ぜる機会を創ることの必要性もあらためて感じました。

今回いただいた提言を今後の居場所づくりの参考にさせていただき、地域の高齢者が誰でも気軽に参加できるように、またその居場所を継続的に運営できるよう支援をしていきたいと思いをしました。

文献

- 1) 金美辰（2020）「老人福祉館利用地域高齢者の社会活動と継続利用に関する研究」
- 2) 大石智（2021）「高齢の人のこころに変化が生まれる時」
- 3) 西川真理子（2017）「居場所の条件—高齢者の居場所から大学生の居場所を考える—」
- 4) 齋藤建児（2021）「高齢者の社会的居場所に関する研究：山形県酒田市を事例として」
- 5) 西智弘（2021）「高齢者の暮らしと社会的処方」
- 6) 金美辰（2020）「高齢者の居場所形成に関する現状と課題」
- 7) 菊池信子（2022）「高齢者の居場所とソーシャルワーク」